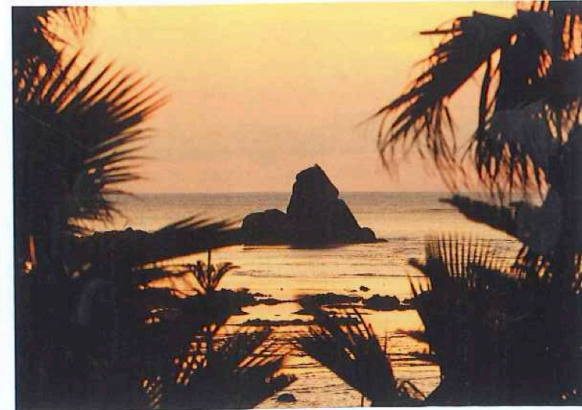


特集

島の美景

奄美大島

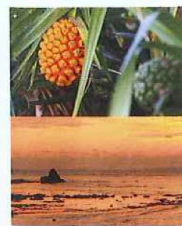
24



第2特集	The New Wind	風を寿ぐ—フランスの奇才とみやこの共鳴	53
Signature Interview	吉田 都	ふたたび幕が開き、その先に見えるもの	11
今月の一品	赤坂 桃の木	ゴロゴンゾーラを点心に!?	14
Column Signature	Science	文・元村有希子 月を愛で、ともに生きる	17
	Art	文・橋本麻里 木、草、土、石……自然と共存し、優れた造形物として継がれてきた日本の建築文化をたどる	18
	Entertainment	文・林田直樹 新たな年の到来を祝う「オペレッタの殿堂」ウィーン・フォルクスオーバー交響楽団、ニューイヤー・コンサート	19
What's new ?	Fashion	ラグジュアリー新時代の「リナイロン」ドレス	20
	Watch & Jewelry	技と美の結晶 伝統メゾンの最新名機	21
	Gourmet	特別な「いなり寿司」で 新たな年の寿ぎを	22
	Beauty	服を着替えるように 今日の香りを選んで	23
連載	石川直樹の「日々是冒険」	冬のk2へ向かうシェルパたち	40
新連載	銀座の不思議	100年ぶりの銀座再復興?	42
	京の名水 古都の味	水が育むまるやかな風味 京都・伏見の「女酒」	43
HUBLOT		ホリデーシーズンに選ぶペアウォッチ	46
TOYOTA		“先進”のフラッグシップ	48
		先進技術を極めたTOYOTAのフラッグシップ、ニュー・クラウン登場	50
HYSEK		勝利を象徴する時計	52
VACHERON CONSTANTIN		マニア垂涎のコレクションが来日	66
ROLEX		先駆者をサポートするロレックス賞	70
Signature Golf Special		コロナを乗り越えてさらなる高みへ 3人の女子プロに聞く、2021年シーズン	72
Diners Club 60th Anniversary Project		「絆を語る」第七回 ホテルニューオータニ(東京)	74
AUDEMARS PIGUET BOUTIQUE OSAKA		オーデマ ピゲの魅力を伝える至高のブティック	75
Diners Club 60th Anniversary Special		2020年12月、新しいダイナースクラブが、はじまる。	82
Signature Information		シグネチャー インフォメーション	102
Club Signature		「お客様のお声」への取り組み	

Club House	「お取り寄せ」サービス	83
	グルメ	84
	キャンペーン	84
	京都エリアポイントアップ	90
	トラベル	95
	インフォメーション	96
	チケットサービス	100

表紙写真 佐藤良一
九州南方海上、鹿児島と沖縄のほぼ中間に位置し、亜熱帯独特の美しい自然が多く残る奄美大島。神に祈る伝統行事や100を超える工程を経て完成する大島紬などの伝統産業。古から島人たちが大切にしてきた島の風景、伝統文化は、訪れる者にどこか懐かしいあたたかさを感じさせる。



アートディレクション・デザイン ナカムラグラフィック
DTP 株式会社Gruppe S
企画制作 株式会社トド・プレス
広告に関するお問い合わせは
株式会社マイク
電話03-5935-7600



特集

島の美景

奄美大島

Special Feature :

Scenery to Remember - Amami Oshima Islands



島の美景

Special Feature
Scenery to Remember - Amami Oshima Islands

Photographs by
Ryoichi SATO
Text by
Hiromi SUZUKI

奄美大島

鹿児島市から南に約380キロメートル。鹿児島市と沖縄本島のほぼ中間に位置する亜熱帯の島・奄美大島。珊瑚に彩られたコバルトブルーの海と稀少な動植物を育む深山。そこに琉球、薩摩の文化が混じり合う風土は、訪れる者を魅了する。島の言葉「ネリヤカナヤ」は、「海の彼方の楽園」を意味する。幸せや豊かさは海の彼方からやってくるという伝承だ。そんな豊饒の奄美に流れる島時間が紡いだふたつの物語。日本を再発見する旅へ。

写真・佐藤良一 文・鈴木博美

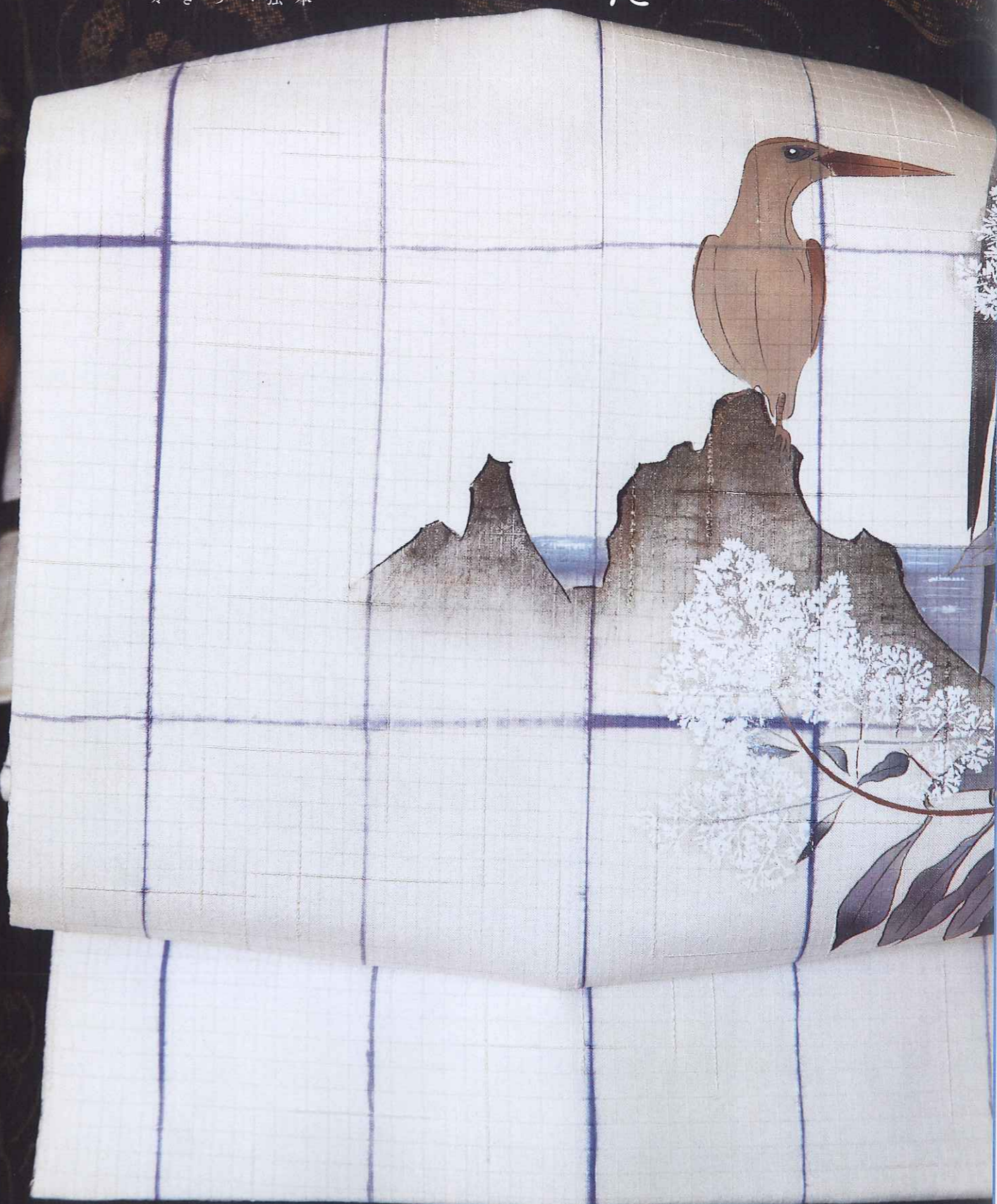
奄美大島の南部、瀬戸内町にある標高415mの高知山展望台からは、大きなシダが群生する亜熱帯の森の向こうに美しいリアス式海岸の大島海峡、対岸の加計呂麻島、その奥には請島、与路島、徳之島を一望できる。

亜熱帯の
島の自然に
身を委ねた

画家・

田中一村

1958年の初冬、ひとりの日本
画家が奄美大島に移り住んだ。独
特の世界観で描かれたその作品は、
島では身近な鳥や植物が題材だっ
た。そんな奄美大島の風景を描き
続けた画家・田中一村を島の人々
は「宝」だと言う。



「鹿児島県奄美パーク」内にある「田中
一村記念美術館」。奄美大島の海をイメ
ージしてつくられた池の上に高倉を模し
た展示室が立ち並ぶ。トレードマークと
も呼べるふろしき包みにハブ避けと、杖
代わりにしていたこうもり傘、地下足袋
姿の一村の石造彫刻が迎えてくれる。



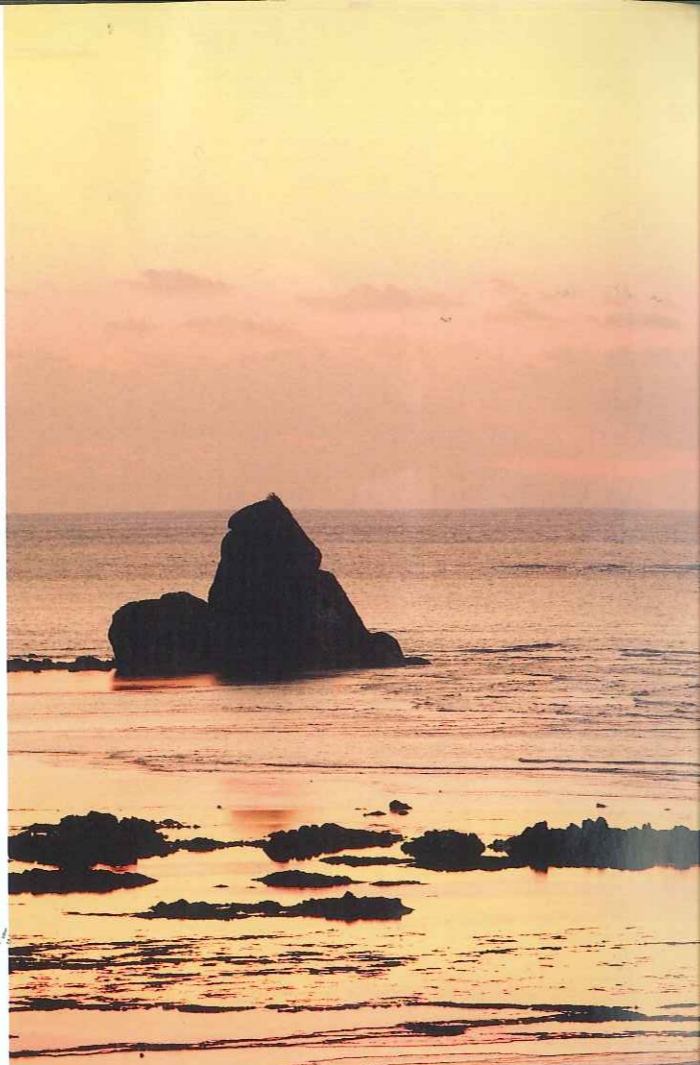


一村が度々モチーフにした「立神」と呼ばれる沖合に浮かぶ小島が、奄美大島を囲むように立っている。ネリヤカナヤからやってくる神様の道標とされている。



田中一村記念美術館

住所：鹿児島県奄美市
笠利町節田1834
鹿児島県奄美パーク内
電話：0997-55-2635
開館時間：9:00～18:00
*入館は閉館時間の30分前まで。
入館料：大人520円、
高校・大学生370円、
小・中学生260円（現金のみ）
<http://amamipark.com/isson/>



1996年当時、今はなき「新宿三越美術館」で見た奄美の島を描いた絵画に惹き込まれた。熱帯の植物の力強さ、妖艶な花、それでいて儚さを感じさせる色彩を纏った絵画は、単なる南国の情景とはかけ離れていた。その画家の名は田中一村。作品の舞台となった奄美大島を訪ねたのは暦の上では晩秋だが、南国の力強い日差しがアダンの木を照らし、季節外れのダチュラの花が迎えてくれた。

早朝、一村の作品の中でもたびたび描かれている「立神」が、逆光の中でシルエットとなって浮かび上がった。古くから奄美大島では、海の彼方に「ネリヤカナヤ」と呼ばれる神が住む国があり、神はこの「立神」を通り、島に豊饒をもたらすと信じられてきた。人々は山と海との間で田畑を耕し、自然の恵みを受け、時には厳しい姿を見せる自然を受け入れながらも、たくましく生きてきた。この美しくも厳しい自然に囲まれた島で、一村はたったひとり、最後の20年近い歳月を作品制作のためだけに費やした。

田中一村、本名は田中孝。栃木県南部、現在の栃木市に6人兄妹の長男として生まれた。仏像彫刻家だった父親の手ほどきを受けて画を学び、「神童」と呼ばれた幼少期を過ごす。1926年に東京美術学校（現・東京藝術大学）に入学。同期には橋本明治、東山魁夷といった、後に日本画壇を担う人々がいた。しかし自身の病気や教育方針の違いから、わずか2か月余りで退学。独



左：「白花と赤翡翠」で描かれているダチュラの花。奄美大島では梅雨入りの時期に咲き始める。中：葉色は赤、黄、緑など、鮮やかなクロトンは熱帯の魚とともに描かれている。右：あやまる岬に向かう途中、一村が写生をした場所に碑が立っている。



「アダンの海辺」

「アダンの海辺」田中一村画 個人蔵・千葉市美術館寄託
©2020 Hiroshi Niiyama

1969年に描いた奄美の日常風景を切り取った一村の代表作。砂の一粒一粒まで描写され、静かな波音が今にも聞こえてきそうだ。

孤高の画家の史乗

田中一村

Isson TANAKA

日本画家

1908年（明治41年）、栃木県に生まれる。幼い頃から画才を発揮し、7歳の時、彫刻家である父の彌吉（号「稲村」、「稲邨」）より号「米邨」を与えられる。1921年（大正10年）に東京市芝中学校に入学。南画の研究・制作に励むようになる。1926年（大正15年）、東京美術学校に入学するも、わずか2か月余りで退学、その後南画家として活動する。第19回青龍社展に「白い花」を出品入選するが、その後中央画壇とつながりをもつことはなかった。1958年（昭和33年）、50歳で単身奄美大島に移住。紬工場で染色工として働き、蓄えができたなら絵を描くという生活を繰り返し、亜熱帯の植物や動物を描き続けた。1977年（昭和52年）、69歳、清貧で孤高の中、ひっそりとだれにも看取られずその生涯を閉じた。



THIDAMOON

大島紬の織元が運営する『THIDAMOON (ティダムーン)』は、奄美大島の東海岸、節田立神を望む美しい珊瑚礁が広がる土浜海岸の前に立つ、美に溢れたリゾートホテル。2020年7月に完成した「一村スイート」は、田中一村代表作のリトグラフや大島紬で制作したアートワークなど、奄美の「美」の世界を表現する。テラスでは山から聞こえてくる一村が描いたアカショウビンやルリカケスの声に癒されることだろう。特筆すべきはここで働くスタッフのほとんどが大島紬の織り子さんや職人さんということ。織り子さんがつくる、奄美の恵みをたっぷり味わえる長寿朝食は必食だ。館内2階に併設する『大島紬美術館』では、ニューヨークの美術館が購入しようとしていた一村の大作を島に残すため買い取った「四季草花図」をはじめ、素晴らしい大島紬の伝統と美の世界を存分に体感できる。

奄美リゾートホテル THIDAMOON

住所：鹿児島県奄美市笠利町平 1260
 電話：0997-63-0006
<https://thidamoon.com>



田中一村終焉の家

住所：鹿児島県奄美市名瀬有屋町 38-3
 電話：0997-52-1111 (奄美市細観光課)
 見学自由 (敷地内及び建物外観のみ)



エさんも当時のことをよく覚えているという。「白のランニングシャツとステテコは、いつも皺一つなくパリッとしていましたよ。とても義理がたい人で、デッサンに使用した魚をあげても、いつも目につかない場所にそっとお金を置いていくような人でした」。画を描くためだけに移り住んだ一村は、周囲には変わり者に映っただろう。しかし少なからずとも島の人たちの触れ合いがあり、その誠実さは皆が共通する一村の印象だ。

奄美に腰を据えて19年が経った1977年9月、区画整理のため長年住んだ借家を立ち退き、近くの一軒家に移った。現在「田中一村終焉の家」とされている家だ。畳を新しくし、これから

画が描けると大層な喜びようだったといわれている。移って間もない9月11日、夕食の準備中に心不全で倒れ、誰にも看取られることなく突然69年の生涯を終えた。生前は個展を開くことは叶わなかったが、島の人にはこんなことを語っていたという。「私の死後、50年か100年後に私の画を認めてくれる人が出てくればいいのです。私はそのために描いているのです」と。

一村がスケッチと運動を兼ねて歩いていた本茶峠を訪れてみた。山を抜ける風が群生するクワズイモの大きな葉を揺らし、鳥のさえずりが静寂の峠に響く。亜熱帯の森に抱かれるように自らの目と心を信じて描いた一村の姿が目に見えようだった。



1.大島紬は糸で柄を織るのではなく、あらかじめ描いておいた図面に合わせて糸を染める。一村は指定された染料をヘラに取り、一線ずつ繰り返して織り込んでいく工程を任されていた。2.一村が散歩した本茶峠に群生するクワズイモ。3.当時魚屋を営み一村と仲良くしていた押川フサエさんと娘の山田摩理子さん。4.工場の行き帰りの歩姿を見ていた保宜夫さん。5.現在の一村終焉の家は区画整理のため実際の場所から300mほど離れたところに立つ。

また一村が働いていた大島紬工場の近くに当時あった鮮魚店では、よく一村が足を止めて店頭で並ぶ珍しい熱帯の魚を凝視していたという。「一村さんは母にだけは気を許し、よく話していました。うちの縁側に商品の魚を運んでデッサンをしていたのを見ていました。短い鉛筆でタッチは早く、とても厳しい顔つきでした」。山田摩理子さんは話す。今年で96歳になる母のフサ

学の道歩み始めることになる。23歳の時、写実的で描く対象を身近なものへと寄せた、将来行くべき画の道をはっきりと自覚した「水辺にめだか枯蓮と藍の臺」を発表した。しかし、それを支持する者はなかった。やがて両親、兄弟が次々と逝去し一家は転々と住まいを替え、親戚を頼って千葉市の千葉寺町へ移り住む。

その後、1947年、一村39歳の時に、「白い花」が「青龍社展」で入選し、画壇へのデビューを果たした。その際に、一村と改名する。この頃から日展や院展などの画壇への挑戦を試みるも、ことごとく落選の憂き目にあい、画壇とも訣別し独自の画道を進む。画壇から遠ざかった一村は、独り飄然と旅に

出る。熊本から高千穂を経由して、青島を見て鹿児島に入り、四国にまで及んだ。その旅で感じた南の生命力溢れる植物の数々に強く惹かれ、沖縄返還前の当時日本の最南端だった奄美群島の奄美大島への移住を決意する。一村50歳の時であった。

移住後、一村は名瀬の市街地から少し離れた有屋という町に、小さな家を借りて落ち着いた。わずかな土地に野菜を植えて自給自足に近い暮らしを送りながら、本土とは異なる風景に新たな色彩と美を見出し、次々に画布に留めていった。

「鳥をスケッチする時は、画にするのにふさわしいポーズを取るまでじっと待っていたといえます。画からいていね

いな観察と克明な写生、的確な筆力と妥協しない強い姿勢が窺えます。また時には千葉から持参した二眼レフカメラで、植物や鳥など、奄美の自然を撮影したりしていたそうです。そう語るのには、「田中一村記念美術館」の学芸専門員・有川幸輝氏だ。ここでは全国に散逸していた一村の作品を収蔵、季

節ごとに作品を入れ替えながら約80点を常設展示している。

島に渡って3年が過ぎた頃、携えてきた資金も乏しくなった一村は、大島紬工場に働き口を求めた。奄美の人と自然が育んだ大島紬の糸に決められた色を刷り込む「刷り込み染色」が仕事だった。日給は450円。その中から生活費を賄い、さらに画材を買うための貯金をする暮らしが始まった。

「一村さんは痩せ型の長身で、いつも同じ服を着てふるしき包みと傘を手に前屈みで歩いていた変なおじさんという印象でした。母が同じ大島紬工場で働いていたので、遺影画として曾祖父の肖像画を描いてもらったのですが、代金は3000円だったと聞いています」。一村を顕彰する「一村会」副会長を務める保宜夫さんが懐かしそうに話してくれました。その時に描かれた原画は『田中一村記念美術館』に預けてあるが、自宅にはレプリカが今も大切に飾られている。髪の毛の量感や一本一本にいたるまでの細やかな描写は、まるで写真と見紛うほどの精巧さだ。

第二章

その先の まだ見ぬ島へ 与路島

その昔、薩摩藩と琉球王国との交通の要衝を担い、繁栄を築いた小さな島がある。奄美大島の南端、東シナ海と太平洋に挟まれた海域に浮かぶ与路島。現在は、その繁栄ぶりを窺い知ることができないが、サンゴの石垣が残る集落は島の原風景。今も生き続ける奄美の遺産だ。

「島の宝100景」に選ばれている与路島の景観を彩るサンゴの石垣。島の石垣積みは長年受け継がれてきた先人たちの知恵。時が止まったような静かな集落。人の気配を察してヤギが小屋からひょっこり顔を出す。



サンゴの石垣に囲まれたシマ

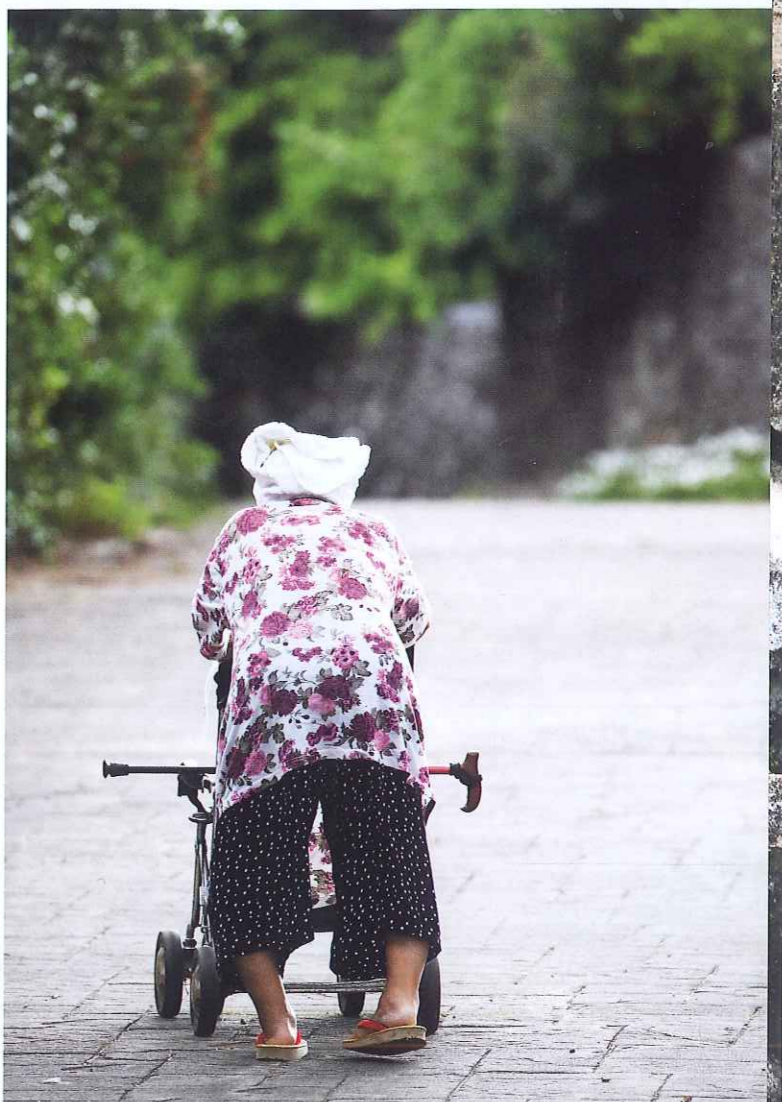
奄美大島の最南端となる瀬戸内町の古仁屋港から、町営の定期船「せとなみ」で洋上をさらに南へ約35キロメートル。約1時間40分の船旅の末に到着する、離島の中の離島と呼ばれる与路島。その道中に望む紺碧色をした大海原、岩壁に群生するソテツの緑深い島々。奄美大島とは違う、荒削りな風景に畏怖の念を覚える。砂の丘が印象的な守り神「ハミヤ島」が見えたら、与路島はすぐそこだ。連絡船は汽笛を鳴らし、港に到着するのを集落に伝える。港の待合所には、「いーおーちゃーどー」という大きな文字。与路島の方言で「ようこそ」という歓迎の意味なのだそう。

奄美では集落のことをシマと呼ぶ。与路島は、島にシマがひとつあるだけの一島一集落。人口は76人、その大半となる高齢者が、ゆったりと流れる島時間の中で生活を営んでいる。そんなシマには昔ながらのサンゴの石垣が今も現役で活躍している。与路島は、奄美群島の中でもサンゴの石垣が数多く

現存する貴重な島として、国土交通省の次世代に引き継ぎたい「島の宝100景」に選ばれている。サンゴの石垣は、台風などの強風から家を守る役目のほかに、家と家との境界線の役割を担い、夏には石垣の隙間から涼しい風を運んでくれる、島の暮らしには欠かせないもの。「かつては10年に1度のペースで、集落総出で拾ってきたサンゴを積み上げたりしていましたが、1955年頃から手間のかからないブロック塀が利用されるようになると、奄美大島ではサンゴの石垣が見られる集落がほとんどなくなりました。与路島でも一部でブロック塀が見られますが、年月が経つと内部の鉄筋などの劣化が問題視され、サンゴの石垣の耐久性が見直されるようになり、島民たちによってサンゴの石垣へと還元されていきました。それは同時に美しい景観の保存と石垣積みみの技術の伝承にも繋がっています」。乗船する前に立ち寄った「瀬戸内町立図書館」郷土館学芸員の町健次郎氏は話していた。

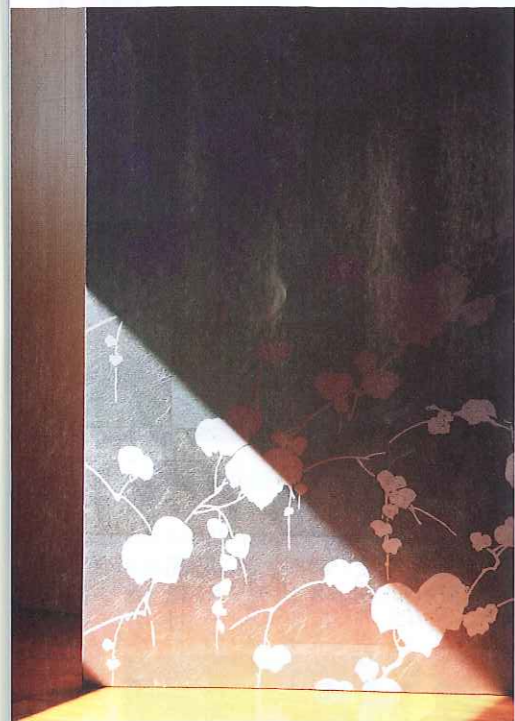
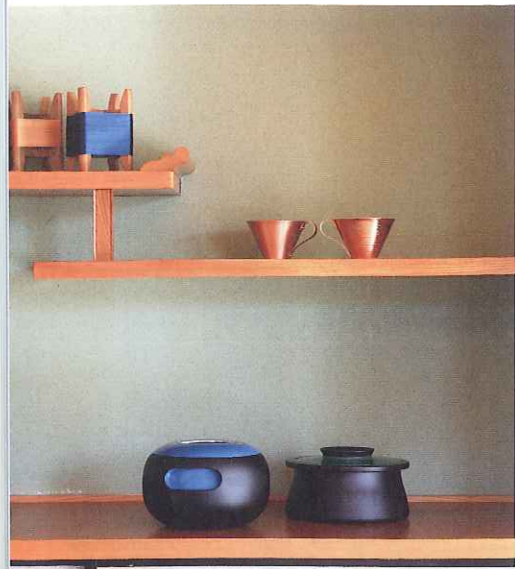
歩いて1周20分ほどの小さなシマには、時の流れを物語る黒い石垣からまだ日が浅い白っぽいもの、苔むした緑色など、様々なサンゴの石垣が景観を形成している。なかにはカンボジアのアンコール遺跡を彷彿させる木の根に絡まれながら強さを増したものの、石垣の上に錦蝶という奇妙な多肉植物がニョキニョキと生えていたり。そんなフアンタジックな景観の中で唯一邪気をはらんでいるのが、石垣の至る所に立て掛けられた「ハブ用心棒」。ハブが出現した時に叩いて撃退するという。いざ遭遇しても、使いこなせる自信はまったくないけれど……。

与路島へは町営定期船「せとなみ」または海上タクシーを利用する。奄美大島のすぐ南隣にある加計呂麻島のさらに南方に請島・与路島と並んでいる。南へ下るほど時間の知覚がスローダウンする。奄美大島の島民でもこの島に訪れたことがあるという人は多くない。



与路島へ向かう船からは、岩山に張り付くソテツの群生、海からしか行くことができない洞窟や雨の後に出現する滝など、手付かずの自然が見られる。与路島は奄美群島の有人8島の中でももっとも小さい島。サンゴの石垣は島の大半の家はまだ残っている。





13の「クールジャパン・アワード」受賞作品を室内にあしらい、実際に触れて使ってみる。見慣れているラタンや畳の美しさを再発見させてくれる。気に入れば購入も可能。宿は最大定員6名。奄美空港から与路島までの送迎や食事の手配も可能。

シマに芽吹いた新たなる美空間 CJ CASA aoao

整然と積み上げられたサンゴの石垣の門をくぐった奥に佇む、藍染杉が美しい古民家。CJ「CASA aoao」は、村長の邸宅跡地をリノベーションした伝統家屋の一軒宿だ。「Feel the COOL JAPAN」をコンセプトに、与路島の自然と匠の美に触れながら、日本の伝統文化を再発見する旅を提案している。

COOL JAPANとは、日本のものづくりやまちづくり・文化に至るまでのモノ・コトを諸外国の審査員100人が国際的な視点から評価したものを、協議会が「クールジャパン・アワード」として認定し、国内の産業・文化の発展を促している。そんな日本の遺産とも呼べる「クールジャパン・アワード」受賞作品を実際に手に触れられる宿泊

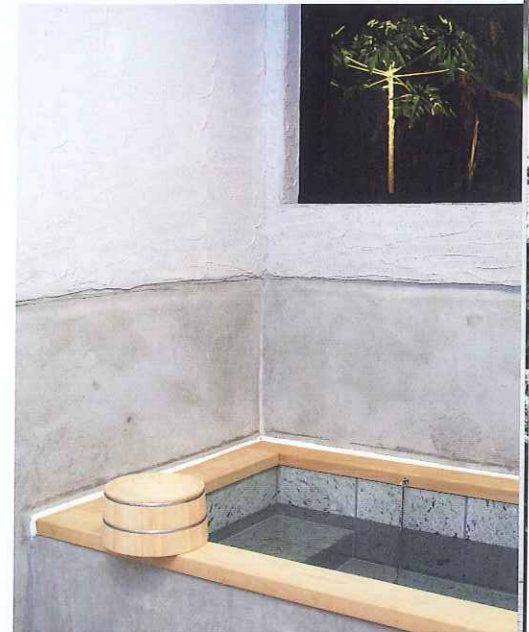
伝統家屋を改装した「aoao」は、古民家が生み出す趣と温もりのある雰囲気はそのままに、建物の素材と調和したインテリアでまとめ、和モダンな空間に仕上げている。

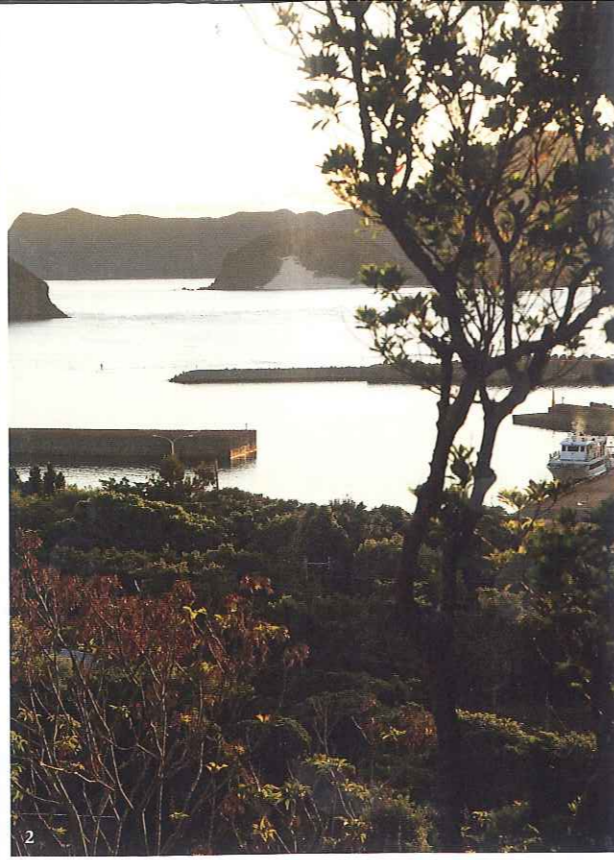


施設だ。「与路島の海の青、外壁の藍染杉、そして日本では着物やのれんなど、古くから生活の至る所にあふれる青をイメージして「aoao」と名づけました。ここにはサンゴの石垣、サガリバナの小径、神が宿る島と崇められるハミヤ島といった、島の美しい原風景が残っています」。そう話す太田雅人氏は、クールジャパン協議会の会長兼ファウンダーとして、自治体や企業と連携して国内外に日本の宝を発信する。また与路島のすべての塀をサンゴの石垣に戻す活動準備を進めている。

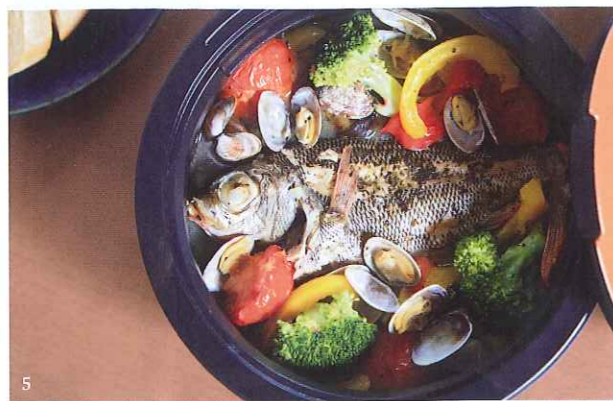
「aoao」ではインテリアや家具、食器類などで「クールジャパン・アワード」の受賞作品を揃えている。表玄関を飾るのは、「江戸からかみ」の二曲屏風。

東京・台東区浅草の職人が、手加工で和紙に装飾を施した伝統工芸品だ。光の移ろいとともに印象の変わる雲母の優雅な煌めきが、朝昼夜それぞれ異なる表情で出迎えてくれる。また「ヤマカワラタン」のラウンジチェアは、絶妙な張り具合と、包まれているような安定感がいつまでも座っていたいと思わせる。島の時間をさらに心地よく過ごすための名脇役だ。一日の疲れをリセットしてくれるデザイン浴槽「ERIN Series」は、吉野檜とほんのり青みがかつた十和田石を使用した浴槽。檜のよい香りと石から発するマイナスイオン効果が、極上のリラクゼーションを生み出す。宿泊することで日本住宅にある静かな美意識、和の魅力、そして日本の匠の技術に気づかされる。





1. 優美な書院障子と和モダンなインテリアが心安らぐリビングルーム。2. 宿の裏山のテラスから望む朝日に照らされる与路の港と海。3. シマを歩いていると猫とよくすれ違う。猫も島時間。悠々と暮らしている。



4. ほぼ貸し切りの天然ビーチ「アテツ浜」。5. アナオリカーボンポットでつくったアクアパッツァ。食材や欲しいものは朝、コンシェルジュに頼んでおけば当日16時到着の定期船で運んでくれる。6. 学校帰りの島の子供たち。笑顔の挨拶にシマの温かさを感じる。7. 海岸線に茂るアダンの防潮林は、サンゴの石垣と並ぶ与路島の文化的景観。



「CJ CASA aoao」では、与路島観光協会と協働のもと、島内におけるコロナ感染防止を図っています。現在、入島制限等の措置は取られていませんが、事前確認をお願いします。詳しくはwebを参照。

らした身と旨みがたっぷり詰まったスープまで完食の、ごちそうが手間なく簡単につくれています。

陽の光が和らぎ空と海が淡いオレンジ色に染まる夕刻、シマはほんの少し活気づく。定期船に積まれた荷物を運ぶ人々、港のベンチに腰を下ろし夕涼みするおじい、おばあ、家路を急ぐ子供たち、サンゴの石垣の上を歩く猫。静かな海辺にはアダンの木が夕日を告げ、亜熱帯の離島に一日の終わりを告げている。それはまるで、画家・田中一村が描いた「アダンの海辺」そのものだ。

CJ CASA aoao

住所：鹿児島県大島郡瀬戸内町大字与路 334
Tel：0997-72-5295（せとうちITBASE内 予約受付 11:00～18:00）
<http://cjcasa.jp/aoao/>



空がうつすらと白みはじめた朝の気配に目を覚ます。「aoao」のコンシェルジュの案内のもと裏庭の小高いサンライズスポットに向かうと、ちょうど朝日が昇るところだった。凜とした空気の中、ゆるやかなエネルギーに満ちた朝の空気をいっぱい吸い込む。眼下には定期船が出航に備えている。「本日のおせとなみは予定通り7時に出航します」。シマ内に響く町内放送で島の一日が始まる。離島ゆえに、定期船が輸送の大動脈を担っているのだ。一日一便、入出航する朝と夕方に合わせるかのように島のリズムが刻まれる。

午前11時、シマから見える、まるでプライベートビーチのようなアテツ浜まで散歩する。港沿いを歩いていると「クモデイ（雲瀬）の碑」なるものが立っている。クモデイは入道雲の姿に似た岩。土着信仰のノロ祭祀が行われていた神聖な場所だという。アダンのソテツが鬱蒼と茂る丘を越え、積み重なった岩をアドベンチャー気分でも渡っていくと、開けた海岸にたどり着く。透明度の高い海と300メートルはあろうかというビーチを「独り占め」した状態は、まるで映画のようだ。

シマには簡易商店が2軒あるものの、滞在中の食事は基本自炊となる。単に古民家に泊まるだけに留まらず、島での生活が実体験できるのも魅力の一つだ。本日のランチは「クールジャパン・アワード」受賞品のカーボンポットを使って、島に渡る前に仕入れた地魚でアクアパッツァをつくる。魚のふっく

「シマ時間」に身を委ねる離島の日

